

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	E S Dの導入による小・中・高等学校のカリキュラム改善を目指した研修プログラムの開発
プログラムの特徴	<p>E S Dの視点を取り入れた小・中・高等学校の総合的な学習の時間を中心とした体系的なカリキュラム構築を目指した教員研修プログラム</p> <ul style="list-style-type: none">・教務主任，研修主任などのミドルリーダーを対象とした研修プログラム及びE S Dに取り組む学校の校内研修の支援もあわせて実施する。・E S Dの視点に関して，環境省中部環境パートナーシップ（E P O中部）のチーフプロデューサー（N P O法人ボランタリーネイバーズ所属）などのアドバイスを受ける。・既存のカリキュラムにどのようにE S Dの視点を導入するかを研修で考案し，学校で組織的に検討して，実践する。・カリキュラム開発の進んでいる学校（4校）とこれから開発する学校（3校）のそれぞれのミドルリーダーの研修を一緒に行い，協議を重ねてよりよいカリキュラムを構築する。・研修プログラム内容のエッセンスをeラーニング化し，研修者の所属校の他教員も研修内容が理解できるようにする。

平成 25 年 3 月

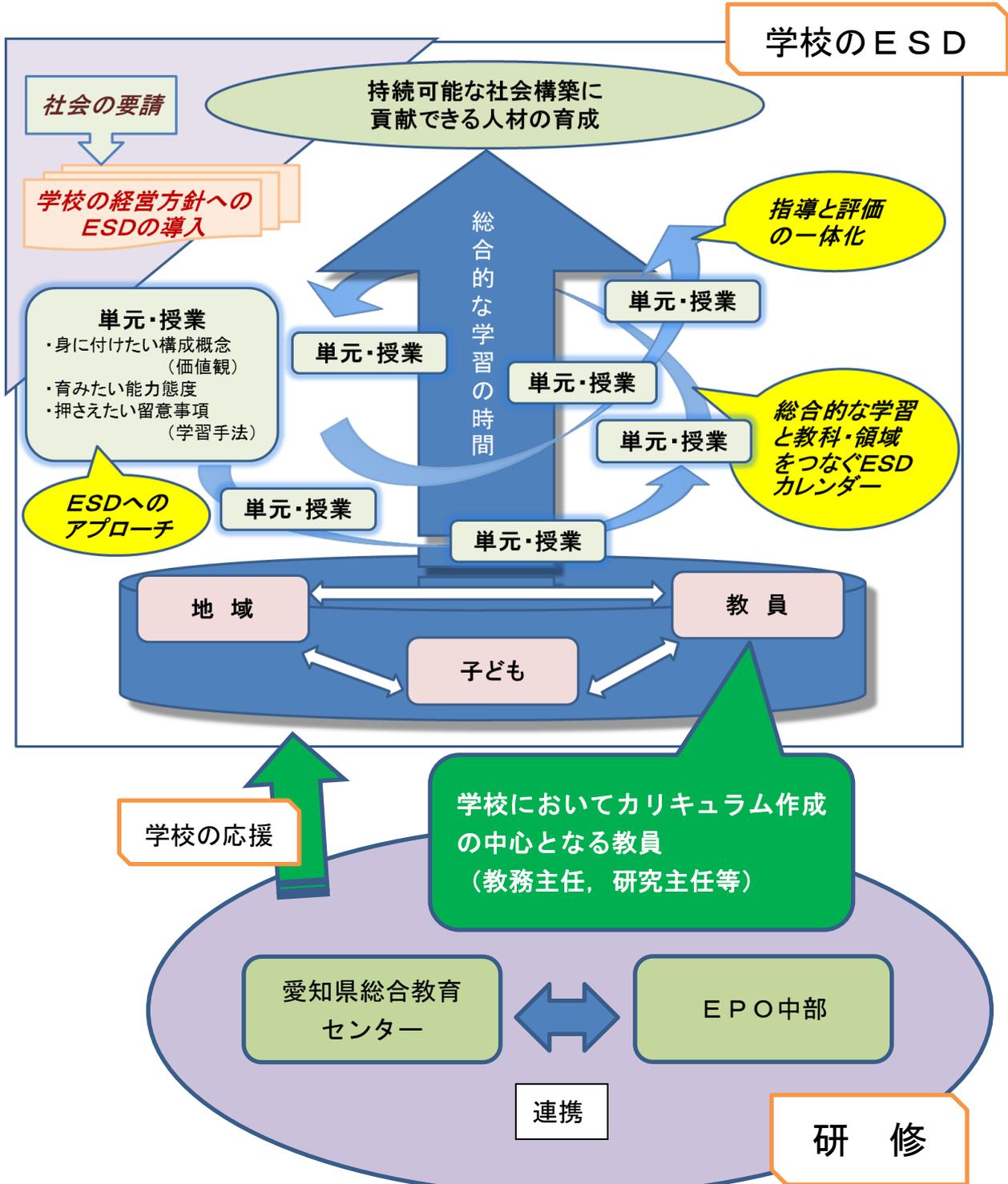
機関名 愛知県総合教育センター

連携先 環境省中部環境パートナーシップオフィス

プログラムの全体概要

E S Dの視点を取り入れた小・中・高等学校の総合的な学習の時間の充実を目指した研修プログラムの開発

ねらい：学校の中ドルリーダー（教務主任，研究主任等）を対象とし，実際に各学校の総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムにE S Dの視点を導入する。



I 開発の目的・方法・組織

1. 開発目的

平成20年7月に発表された「教育振興基本計画」において、ESD (Education for Sustainable Development) は、「持続発展教育」と訳出され、我が国の教育の重要な理念として位置付けられ、ESDを担う人材の育成や教育プログラムの作成・普及に取り組むことが明記されている。なお、ESDは、人とのつながりや、実際の課題解決やそれに向けた行動という面を重視しており、学校教育に取り入れるには総合的な学習の時間への導入が最も適していると考えられる。

総合的な学習の時間は、学習指導要領において、更に探究的な学習とし、論理的思考力、コミュニケーション能力、問題発見・解決能力を高めていくことが求められている。そのためには、学年が上がることに大きな目標に向けて力を付けていけるような、総合的な学習の時間を中心とした体系的なカリキュラムが有効である。そのカリキュラム開発においては、ESD (持続発展教育) の視点を取り入れると効果的であることが平成20年からの当センターの研究で明らかになってきた。そこで、ESDの視点を取り入れた総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム開発のための研修プログラムの開発を行った。

2. 開発の方法

開発にあたっては、愛知県総合教育センターの教育研究調査事業「環境教育の在り方に関する研究—持続可能な社会構築を目指して—」(平成20年, 21年度)と「生きる力を育むESD実践カリキュラムの開発に関する研究」(平成22, 23年度)の成果を基に、連携機関である環境省中部環境パートナーシップオフィスのチーフプロデューサー、スタッフと研修プログラム開発委員会をもち、教員研修プログラムを立案し、実践・検証しながら開発を進めた。

また、研修の実践に当たっては、ESDについて研究を進めている、国立教育政策研究所 五島政一統括研究官の指導を受けた。

3. 開発組織

開発組織として研修プログラム開発委員会を組織した。EPO中部は、ESDについての指導のノウハウを蓄積しており、その蓄積を活用した。

No	所属・職名	氏名	担当・役割
1	愛知県総合教育センター 所長	杉浦 慶一郎	全体統括
2	研究部長	小塩 卓哉	研修プログラム開発研究統括
3	研究部教科研究室長	櫛田 敏宏	主担当者・研修プログラム実施
4	研究部経営研究室長	山口 明則	研修プログラム実施
5	研究部研究指導主事	佐々木 佐知子	研修プログラム実施
6	研究部研究指導主事	佐治 宏昭	研修プログラム実施
7	EPO中部・チーフプロデューサー	新海 洋子	研修プログラム実施指導
8	スタッフ	山口 奈緒	研修プログラム実施指導

II 開発の実際とその成果

研修名「生きる力を育むESD実践カリキュラム開発」研修

1. 研修の背景やねらい

現状として学校教育におけるESDの実践事例は少なく、モデルとなる実践カリキュラムの開発・普及が急務となっている。それとあわせて、教員の研修が不十分な状態であり、ESDを推進する指導者の養成(研修)を早期に実施しなければならない。しかし、当センターにおけるESD研修のノウハウは不十分である。そこで、以前よりESDの普及・啓発に努めている「環境省中部環境パートナーシップオフィス(略称: EPO中部)」の協力を得て、学校の総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムにESDの視点を導入するための教員研修プログラムを開発し、実施していきたい。その成果は、他県に対してのモデルケースとなると思われる。

この研修プログラムは、学校のみドルリーダー(教務主任, 研究主任等)を対象とし、実際に各学校の総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムにESDの視点を導入することをねらいとする。また、研修には、昨年度の研修経験者と今年度新規の研修者を参加させ、両者の学び合いも活用する。

2. 対象, 人数, 期間, 会場, 日程, 講師

(1) 対象, 人数, 期間, 会場

対象, 人数: 教務主任などのみドルリーダー 経験者グループ 4名, 未経験者グループ 3名
計7名 及びその所属校の全教員(校内研修)

期間: 平成24年5月から3月まで

会場: 総合教育センター

(校内研修では, 各学校)

(2) 日程・講師

時期等	内 容	目 的
① 5月16日 (水) 9:30 ~ 16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・講義「総合的な学習の時間の意義と効果的な展開」 (講義内容) 新学習指導要領における総合的な学習の時間について, 求められる力や学習手法について講義する。 ・講義「ESDの目標, 手法」 (講義内容) ESDの求める価値観や能力, そして効果的な学習手法について, 事例を取り上げながら講義する。 ・演習「研修目標の設定」 勤務校のカリキュラムにESDの視点をそのように取り入れるか。ESDカリキュラム推進の先進校の事例を参考にしながら, 各学校でどのようにカリキュラムを開発するか考える。 講師等: 教育センター職員, EPO中部チーフプロデューサー	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領における総合的な学習の時間の位置付け確認する。 ・ESDの視点の取り入れ方についての理解をする。 ・研修目的の明確化 先進校4校と新しく取り組む3校でそれぞれ目標を立てる。
② 6月22日 (金) 9:30 ~ 16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・講義「学校におけるESD先進事例」 (講義内容) ESDカリキュラムの実践が, 順調に進んでいる先進事例を紹介する。 ・演習「カリキュラム検討の状況 1」 先進学校4校と新しく取り組む学校3校が, それぞ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ESDの先進的な取組について理解する。 ・各学校の取組について協議し, NPOチーフプロデューサーの助言を受

	<p>れの取組について発表し、協議する。</p> <p>講師等：教育センター職員，EPO中部チーフプロデューサー</p>	<p>け，内容の充実を図る。</p>
<p>③</p> <p>7月～ 12月の 任意の 1日</p>	<p>・参観「E S Dの視点を導入した授業の参観」及び演習 教育センター職員とEPO中部チーフプロデュー サーが研修参加者勤務校に出向き，E S Dの視点を 導入した授業の参観と希望があればその学校職員 に対する現職教育で講義等行う。</p> <p>講師等：教育センター職員，EPO中部チーフプロデューサー</p>	<p>・授業にE S Dの視点が明確に導入 されているか確認する。</p> <p>・学校全体でE S Dに取り組むこと ができるよう支援する。</p>
<p>④</p> <p>8月1日 (水) 9:30～ 16:30</p>	<p>・講義「E S Dの評価について」 (講義内容) E S Dカリキュラムの開発法，特に評価について， 講義する。</p> <p>・演習「カリキュラム検討の状況 2」 先進学校4校と新しく取り組む学校3校が，それぞ れの取組について発表し，協議する。</p> <p>講師等：教育センター職員，EPO中部チーフプロデューサー</p>	<p>・E S Dの評価の実際について理解 する。</p> <p>・各学校の取組について協議し，N POチーフプロデューサーの助言を受 け，内容の充実を図る。</p>
<p>⑤</p> <p>10月16日 (火) 9:30～ 16:30</p>	<p>・講義「学校におけるE S Dの在り方について」 (講義内容) 最新のE S D研究の成果を基に，学校におけるE S Dの在り方について講義する。</p> <p>・演習「カリキュラム検討の状況 3」 先進学校4校と新しく取り組む学校3校が，それぞ れの取組について発表し，協議する。</p> <p>講師等：国立教育政策研究所総括研究官，EPO中部 チーフプロデューサー</p>	<p>・学校における効果的なE S Dの導 入法について理解する。</p> <p>・各学校の取組について協議し，国 立教育政策研究所総括研究官，N POチーフプロデューサーの助言を受 け，内容の充実を図る。</p>
<p>⑥</p> <p>11月20日 (火) 9:30～ 16:30</p>	<p>・演習「成果発表会に向けて研究のまとめ」 先進学校4校と新しく取り組む学校3校が，それぞ れ取組について発表し，協議する。</p> <p>講師等：EPO中部チーフプロデューサー</p>	<p>・カリキュラムの検討及び実践の状 況について評価し合い成果をまと める。</p>
<p>⑦</p> <p>11月30日 (金) 9:30～ 16:30</p>	<p>・成果発表会「総合的な学習を中心としたE S Dの視点を 取り入れたカリキュラムの実践」 先進学校4校と新しく取り組む学校3校が，実践に ついて研究発表し，協議する。</p> <p>講師等：国立教育政策研究所総括研究官，EPO中部 チーフプロデューサー</p>	<p>・センター研究発表会を利用し，成 果を報告すると共に，県内の教員 や教育委員会の指導主事の評価を 受ける。国立教育政策研究所総括 研究官，NPOチーフプロデューサー から最終的な評価を受ける。</p>
<p>⑧</p> <p>2月20日 (水) 13:00～ 16:30</p>	<p>・演習「各学校の今後の取組」 先進学校4校と新しく取り組んできた学校3校が 来年度の方向性について発表し，協議する。</p> <p>講師等：EPO中部チーフプロデューサー</p>	<p>・来年度，どのようにE S Dの視点 を取り入れたカリキュラムを展開 していくか，NPOチーフプロデュー サーの助言を受ける。</p>

3. 各研修項目の配置の考え方

研修項目は、ア ESDの理解、イ ESDの実践内容の検討、ウ ESDの実践報告と次年度の課題整理の三項目となる。研修①、②で「ア ESDの理解」を深め、研修②～⑤で「イ ESDの実践内容の検討」を進め、研修⑥～⑧で「ウ ESDの実践報告と次年度の課題整理」を行った。なお、希望があった学校に出向き、現職教育として職員に向けて講義、演習を行った（研修③）。

4. 各研修項目の内容、実施形態、時間数、使用教材、進め方

(1) 各研修項目の内容

ア ESDの理解について

この研修では下記の流れでESDの理解を深めた。

(1) ESDの概念の明確化

ア ESDとは

ESDの概念は、1980年の世界環境保全戦略で初めて取り上げられたが、2002年のヨハネスブルグサミットで日本政府とNGOが共同提案した「国連ESDの10年」（2005年から2014年）の決定で、世界中に知られるようになった。

従来型の開発は、物質的な豊かさをもたらす一方で、環境破壊、食料問題、人権侵害など多くの問題を生み出している。世界中の人々、将来世代の人々が、安心して生活できる社会にするためには、自然、経済を含む社会や人間性をバランスよく維持するなど、持続不可能な状況を克服する行動が必要になってくる。そのためには、さまざまな課題と自分とのつながりに気づき、行動できる意欲と能力、価値観、解決のために多くの人と協働する力などを育てることが重要である。そのための教育がESDである。

文部科学省は、ESDの目標として次の3点を挙げている。3)

- ・持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。
- ・すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。
- ・環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと。

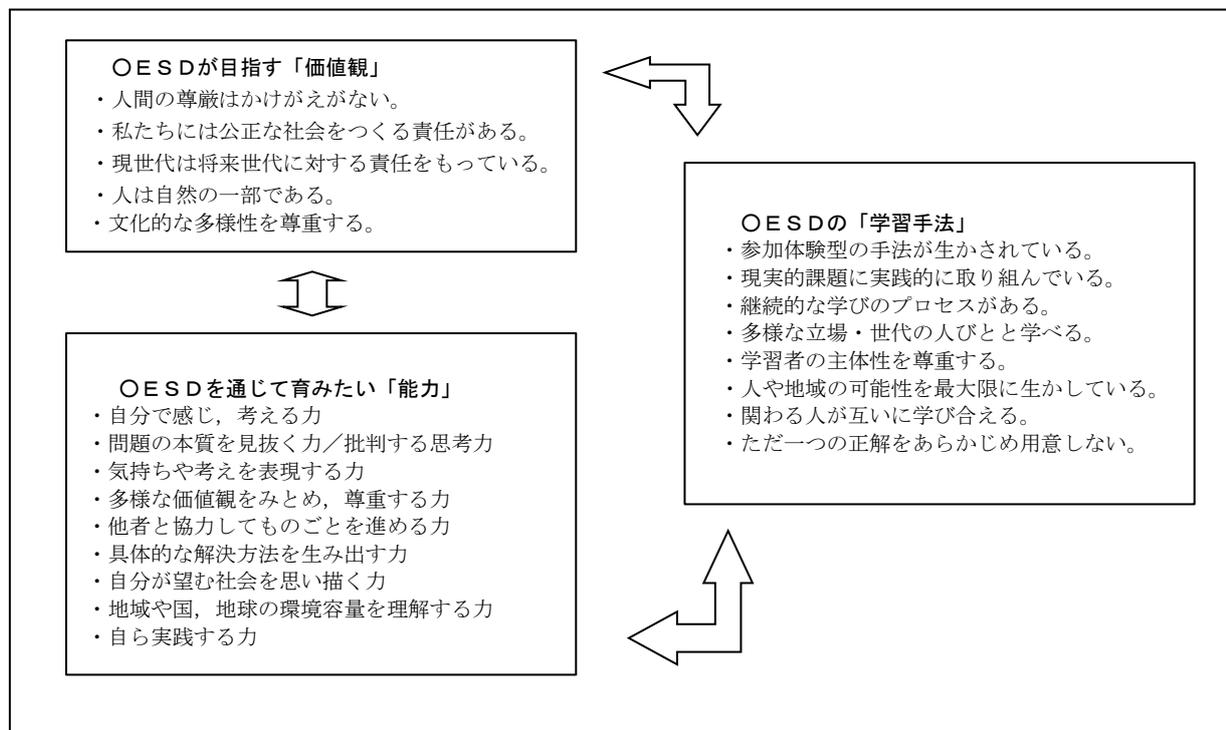
イ ESDの特徴

学校教育をはじめ、社会教育、企業教育などで、環境教育、多文化共生教育、ジェンダー教育、人権教育など、いろいろな社会問題に対する教育が行われている。これらは、すべてESDに関わる。どれも掘り下げると、育みたい力は、多面的なものの見方や問題解決能力、コミュニケーション能力であり、学習手法としては参加体験型、ワークショップ型、価値観としては共生や人間の尊厳がエッセンスとして表れる。これらが、ESDが目指す育みたい力や価値観である（図1参照）。

また、「ESD入門」（2012）では、ESDについて次のように説明している。「従来の環境教育や人権教育、多文化共生教育では、近年、相互に複雑に関連するようになってきた地球的諸課題を解決することができなくなり、相互に乗り入れをすることが必要になってきたという背景もある。環境問題を解決し、その発生を未然に防止することを目的に環境教育が始められ、基本的人権を守り、育てるために人権教育があるなど地球的課題教育はそれぞれに生まれた経緯や存在理由がある。そして、これらの教育が扱う問題は、全てが持続可能性に関わる問題であり、持続可能な社会を創造していくためには解決しなければならない問題である。とすれば、従来からのアプローチのみでなく、持続可能な社会構築といった視点から、他の教育課題と連携しながらアプローチをしていくことは極めて有効であると考えられ

る。例えば、従来の環境教育は、人と自然との関係を改善していくことが目的であり、人権教育は人と人、人と社会との関係を改善していくことが目的であった。これをトータル（統合的かつ総合的）に見ていこうというのがESDと言える」（一部改）6)

図1 ESDが目指す「価値観」、育みたい「能力」、学習手法」



「未来をつくる『人』を育てよう」NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）編 7）より

(2) ESDを学校全体に広める手だて

ア ESDを学校全体で取り組むことの重要性

学校におけるESDは、人とのつながりや、実際の課題解決やそれに向けた行動という面を重視するならば、外部の人材・機関等と連携しやすい総合的な学習の時間への導入が適していると考えられる。また、総合的な学習の時間と各授業を関連させて展開すれば、更に学びが深まる。しかし、そのような授業展開をするためには、教科担当一人で行うことは難しい。学校全体でESDの視点を踏まえたカリキュラムを導入することが望まれる。

成田(2008)は、「教科・領域などの限界・境界を越えて、同僚・保護者・地域・専門機関などとの連携・協働がESDには必要である」8)と教科を越えた連携・協働の重要性を述べ、更に学校全体がESDに取り組み、その実践を持続・継承させることが重要であることを示している。成田(2009)また、及川(2011)は、「ESDの学習活動の「量」よりも「質」を高め、「体系的・系統的」に全校体制で発達段階に応じた長期的な視野で指導していくことがESDには重要である」9)、10)と示している。

このように、学校全体で、持続的にESDに取り組むことの重要性がESDの研究者や実践者によって語られている。では、カリキュラムにESDの視点を取り入れるには、どのような手法があるだろうか。我々は、次の二つの手法に着目した。

(ア) ESDの視点を生かした授業づくり

国立教育政策研究所では、ESDに関して平成20年から研究準備を始め、平成21年度から23年度にかけて、「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」を行っている。昨年度、本研究では、その中間報告書4)に掲載されているチェックシート型アプローチによって、実践にESDの視点を取り入れる試みを行った。平成24年3月には国立教育政策研究所から研究最終報告書5)

が出され、今年度、本研究ではその中で提案されている「E S Dの視点を生かした授業づくり」も参考にして実践を進めた。

この最終報告書ではE S Dの視点に立った学習指導の目標を次のように設定している。

指導目標：「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

そして、そのための「持続可能な社会づくりの構成概念」(p. 10 資料1・表1)と、「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」(p. 11 資料1・表2)、「E S Dの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」(p. 12 資料1・表3)が提示されている。また、E S Dの視点を生かした授業が、そうでない授業とどう違うのかということや、E S Dの視点を生かす際に配慮すべきことなどについて整理するために、指導者は、視点表(p. 13 資料1・表4)を作成するとよい。

この、国立教育政策研究所がまとめた「E S Dの視点を生かした授業づくり」の手法を用いると、各教科や領域等の単元案や授業指導案にE S Dの視点を取り入れやすい。

(イ) E S Dカレンダー（学年毎のE S D内容に関する各教科・領域の関連図）

手島(2007, 2011)が提唱した手法で、学年毎に、一年間の教育の中で、各教科、総合的な学習の時間、特別活動等がどのように結びついているのか、カレンダーに項目を立てて、その関連を分かりやすく結んだものである。学校教育全体でE S Dを進めていくためには、このような関連付けが重要と考え、考案された手法である。11) 更に手島は、単元のねらいや、問題解決的・探究的な学習過程に沿った学習活動や、地域人材・関係機関との連携などの情報を入れた指導計画として進化させていくことが求められていると述べている。12) 我々の実践についても、一部E S Dカレンダーを導入して年間計画を考案した。

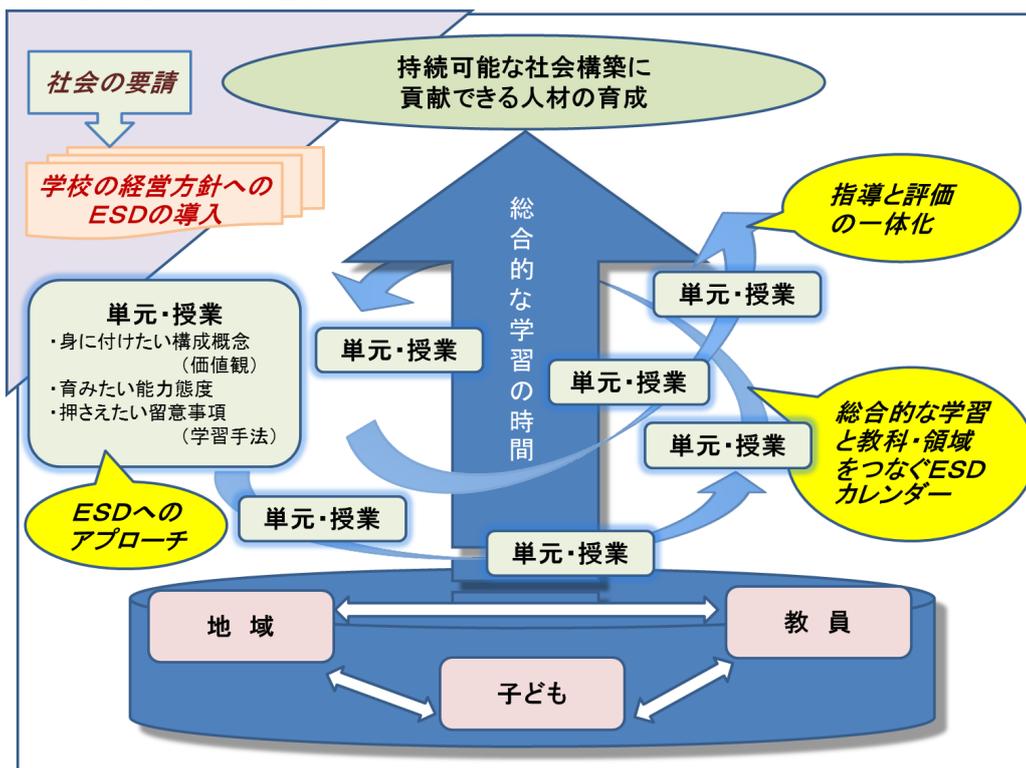
今回、カリキュラムや実践にE S Dの視点を取り入れる手法として、「E S Dの視点を生かした授業づくり」と「E S Dカレンダーの作成」を各研修受講者が行った。

イ 学校におけるE S Dの在り方

項目アでも述べたように、E S Dを学校に取り入れるには、E S Dの理念から言っても、総合的な学習時間を軸とした教科横断型のカリキュラムを作ることが重要である。文部科学省ユネスコ国内委員会では、E S D推進拠点(ユネスコスクール)の大切なポイントとして、「E S Dを通じて育てたい資質や能力を明確にし、自分で、あるいは協働して、問題を見出し、解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するよう努めること」「総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど、指導内容を適切に定め、さらに、指導方法の工夫改善に努めること」を挙げている。13) これは、ユネスコスクールだけでなく、E S Dを学校として進めていく上で大切な視点である。教育課程にE S Dの視点を取り込むならば、やはり学校の経営方針にもE S Dの視点を入れていくべきである。これらをまとめたものがp. 9 図2である。

また、重要なポイントとして、E S Dは一から始めるのではなく、既にあるそれぞれの学校の教育活動にE S Dの視点を入れていくということである。統一性のなかった、教科、総合的な学習の時間、特別活動などをE S Dという視点を入れることによって、「つなぐ」ことができる。この具体的な例は、実践例を見ていただきたい。さらに、E S Dでは「つなぐ」が重要なキーワードである。教科、領域等を「つなぐ」だけでなく、学校(教員、子ども)と地域、外部団体を「つなぐ」ことも重要であり、学校でE S Dを展開する場合、そのつながりは、活動の土台となってくる。

図2 学校におけるESD構想図



ウ ESDの評価

評価については、単元・授業の評価とカリキュラム全体の評価がある。

単元・授業の評価は、現在の教科、総合的な学習の時間で行われている、目標に基づく評価規準の作成、評価という流れで行うことが妥当であろう。実践をした学校の中には、パフォーマンス評価を取り入れた実践もある。カリキュラム全体の評価は、今後の研究課題であるが、児童・生徒、保護者アンケートや学校評議員などの意見を基に総合的に評価することが重要と思われる。

※参考文献

- 1) 「環境教育の在り方に関する研究－持続可能な社会構築を目指して－」愛知県総合教育センター研究紀要第99集 2010.3
- 2) 「生きる力をはぐくむESD実践カリキュラム開発に関する研究」愛知県総合教育センター研究紀要第101集 2012.3
- 3) 「持続発展教育」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>
- 4) 「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 中間報告」国立教育政策研究所 2010.9
- 5) 「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 最終報告書」国立教育政策研究所 2012.3
- 6) 「持続可能な開発のための教育 ESD入門」阿部治・朝岡幸彦監修 筑波書房 2012.8.17
- 7) 「未来をつくる『人』を育てよう」持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）編 2006.12
- 8) 「持続可能な開発のための教育（ESD）カリキュラムの開発の方法」成田喜一郎 環境教育学研究第17号 2008
- 9) 「ESD教材活用ガイド」財団法人ユネスコ・アジア文化センター編 2009.3.19
- 10) 「学校におけるESDの推進とその展開事例」及川幸彦 季刊環境研究 No.163 2011.9
- 11) 「ESDカレンダー（学年毎のESD内容に関する各教科・領域の関連図）公開について」手島利夫 <http://aspnetwork.exblog.jp/5347152/>
- 12) 「New! ESDカレンダーのすすめ」手島利夫 江東区立八名川小学校 2011.6.3, 教育新聞 2011.6.23
- 13) 「ユネスコスクールガイドラインについて」文部科学省ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1326014.htm> 2012.8.12

資料1 表1

指導目標，表1～4 国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」より抜粋（一部改）

指導目標：「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし，それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して，持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

表1 「持続可能な社会づくり」の構成概念（例）

人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念	I 多様性 いろいろある 【多様】	自然・文化・社会・経済は，起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物（ものごと）から成り立ち，それらの中では多種多様な現象（出来事）が起きていること。 ※多様性を尊重し，事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切である。
	II 相互性 関わり合っている 【相互】	自然・文化・社会・経済は，互いに働き掛け合い，それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり，情報が伝達・流通したりしていること。 ※人はさまざまなシステムとつながりを持ち，更にもっとその中で人と人が関わり合っていることを認識することが大切である。
	III 有限性 限りがある 【有限】	自然・文化・社会・経済は，有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）に支えられながら，不可逆的に変化していること。 ※有限の資源を将来世代のために有効に使用していくことが求められ，有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することが大切である。
人（集団・地域・社会・国など）の意志や行動に関する概念	IV 公平性 一人一人大切に 【公平】	持続可能な社会は，基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが，地域や世代をわたって公平・公正・平等であることを基盤にしていること。 ※人権や生命が尊重され，他者を犠牲にすることなく，権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要であり，これらは地域や国を超え，世代をわたって保持されることが大切である。
	V 連携性 力を合わせて 【連携】	持続可能な社会は，多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し，互いに連携・協力することにより構築されること。 ※意見の異なる場合や利害が対立する場合などにおいても，その状況にしたがって順応したり，寛容な態度で調和を図ったりしながら，互いに協力して問題を解決していくことが大切である。
	VI 責任性 責任をもって 【責任】	持続可能な社会は，多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンを持ち，それに向かって変容・変革することにより構築されること。 ※現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し，望ましい将来像に対する責任あるビジョンをもつことが大切である。

資料1 表2 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）

<p>① 批判的に考える力 《批判》</p>	<p>合理的，客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き，物事を思慮深く，建設的，協調的，代替的に思考・判断する力。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者の意見や情報を，よく検討・理解して取り入れる。 ・積極的・発展的に，よりよい解決策を考える。
<p>② 未来像を予測して計画を立てる力 《未来》</p>	<p>過去や現在に基づき，あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し，それを他者と共有しながら，物事を計画する力。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見通しや目的意識をもって計画を立てる。 ・他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる。
<p>③ 多面的，総合的に考える力 《多面》</p>	<p>人・もの・こと・社会・自然などのつながり・関わり・広がり（システム）を理解し，それらを多面的，総合的に考える力。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる。 ・様々な物事を関連付けて考える。
<p>④ コミュニケーションを行う力 《伝達》</p>	<p>自分の気持ちや考えを伝えるとともに，他者の気持ちや考えを尊重し，積極的にコミュニケーションを行う力。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをまとめて簡潔に伝えられる。 ・自分の考えに，他者の意見を取り入れる。
<p>⑤ 他者と協力する態度 《協力》</p>	<p>他者の立場に立ち，他者の考えや行動に共感するとともに，他者と協力・協同して物事を進めようとする態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場を考えて行動する。 ・仲間を励ましながらチームで活躍する。
<p>⑥ つながりを尊重する態度 《関連》</p>	<p>人・もの・こと・社会・自然などと自分のつながり・関わりに関心を持ち，それらを尊重し大切にしようとする態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が様々な物事とつながっていることに関心をもつ。 ・いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する。
<p>⑦ 進んで参加する態度 《参加》</p>	<p>集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち，自分の役割を踏まえた上で，物事に自主的・主体的に参加しようとする態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の言ったことに責任を持ち，約束を守る。 ・進んで他者のために行動する。

資料1 表3 ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項

<p>(1) 教材のつながり</p>	<p>教材や教科等の内容的な「つながり」、教室・学校と地域・社会・国・世界との空間的な「つながり」、過去・現在・未来といった時間的な「つながり」などを図りながら学習を進めていくことが必要である。</p> <p>取り上げた「構成概念」が、前後の学年においてどのような系統性や連続性があるのか（カリキュラム上の縦の「つながり」）や、その「構成概念」が、他教科等においてどのように扱われているのか（カリキュラム上の横の「つながり」）などを明らかにする。</p>
<p>(2) 人のつながり</p>	<p>児童生徒同士の「つながり」を取り入れた参加体験型の学習を展開したり、地域（身近な地域だけでなく、国内や国外、とりわけ発展途上国も含めて）との「つながり」を図りながら、多様な立場や世代の人々との「つながり」が体験できる場を用意したり、さらには、発達の段階に応じて、将来世代や過去世代との「つながり」も想像させたりするなどの工夫をしていくことが必要である。</p> <p>該当単元において、どのような人との「つながり」が学習活動として用意されているかを明らかにする。</p>
<p>(3) 能力・態度のつながり</p>	<p>各学校・地域の実情や児童生徒の実態に応じた課題を取り上げて、教科等における学習と活動との「つながり」や学校と家庭・地域社会との「つながり」を図りながら、継続的・実践的な「つながり」をもった指導を推進したり、現実的な問題解決との「つながり」になるように取り組んだりするなどの工夫をすることが必要である。</p> <p>他の教科等での育成はどうか（例えば、ある教科と他の教科との「つながり」、教科と総合的な学習の時間との「つながり」など）や育成した能力・態度が、どのように生活や地域で活用できるか（例えば、学校での学習と実社会・実生活との「つながり」）などを明らかにする。</p>

資料1 表4 ESDの視点表による整理

単元名「○○○」														
学習内容「◇◇◇◇」														
持続可能な社会づくりの構成概念							ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度							
I 多 様 性	II 相 互 性	III 有 限 性	IV 公 平 性	V 連 携 性	VI 責 任 性	VII 創 造 性	① 批 判 的 に 考 え る 力	② 計 未 画 来 を 像 立 を て 予 る 測 力 し て	③ 考 多 え 面 的 的 力 ・ 総 合 的 に	④ ン コ を ミ 行 ユ ウ ニ カ ケ ー シ ヨ	⑤ 度 他 者 と 協 力 す る 態	⑥ る つ 態 な 度 が り を 尊 重 す	⑦ 度 進 ん で 参 加 す る 態	⑧ 自 己 制 御 能 力
【多様】 ☆	【相互】	【有限】 ○	【公平】	【連携】	【責任】	【創造】 ○	《批判》 ○	《未来》 ○	《多面》	《伝達》	《協力》	《関連》	《参加》 ○	《制御》

※表中の☆印, ○印について: ☆印は, 元々学習指導要領にあるもので, ○印は実践で追加したもの (ESDの視点として取り入れたもの)。このように授業改善の前後で印を付け, 比較すると分かりやすい。
 ※表中の構成概念や能力・態度の要素については, 学校の実態に合わせて付け加えたり, 減らしたりしても良い。

○単元へのESDの視点の導入の方法

表1, 表2, 表3で示された「構成概念」, 「重視する能力・態度」, 「留意事項」を基に以下のように単元の展開を考えていく。

① 単元の目標や内容・教材等を表1「構成概念」に基づいて, どのように捉えるか, また, 単元の授業展開を通して, 児童生徒にどのような表2「能力・態度」を育成したいかを考える。また, 表3「留意事項 (3つのつながり)」に基づいて, 留意すべきことや, 力点を置きたいことを考える。

② 単元の総括目標, 四つの観点ごとの評価規準, 主な学習活動・内容と教師の指導の概要, 本時の目標展開などを考えるが, 学習指導案では, 表1「構成概念」や表2「能力・態度」と関連が深いところを明らかにする (太字体や斜字体で示したり, 表中の【多様】、《批判》などの略号を使ったりすると分かりやすい)。

③ ESDの視点を生かした授業が, そうでない授業とどう違うのかということや, ESDの視点を生かす際に配慮すべきことなどについて整理するために, 視点表 (表4) を作成するとよい。

もちろん, 表1「構成概念」や表2「能力・態度」に当てはまる数が多ければいいというものではない。ただ, 視点表で見ると, 現在行われている実践で, ESDの視点として不足している部分が浮き彫りになってくる。不足している部分を, 教材や授業展開等を工夫することで, よりESDの視点に即した単元に改善していくことができる。

イ ESDの実践内容の検討

研修受講者（小学校2名，中学校2名，高等学校3名）所属校において，カリキュラムにESDの視点を取り入れる実践を行った。

研修受講者による実践は以下のとおりである。1から4の4校は，平成22年度からの実践であり，昨年度から実践を継続している。また，5から7の3校は，今年度からの実践である。

学校名	概 略
1 あま市立甚目寺小学校	ふるさと 甚目寺ー「かかわる つたえる つながる」学習や活動を重視するESDの取組ー 総合学習「ふるさと甚目寺」の学習に，「持続可能な社会づくりの構成概念」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を取り入れ，教材を内容的・空間的・時間的につなげること，人や地域をつなげること，身に付けた能力・態度を行動につなげることを大切にしたい取組を実践し，検証した。
2 東浦町立緒川小学校	個性化教育とESDー総合学習「生きる」をESDの視点で見直し，学校ぐるみで取り組むー 総合学習「生きる」をESDの視点で見直し，体験活動だけでなく探究的な学習になるように改善を進めた。その方針に沿って，各学年で単元開発や授業づくりを行った。6年生の国際理解と自国文化の理解について学習する単元「国際人になろう」にアートマイルプロジェクトを取り入れ，探究的な学びに改善した事例を中心に実践した。
3 岡崎市立新香山中学校	環境を見つめ，考え，働きかける生徒の育成ー環境学習を基盤としたESDの展開ー 既に導入されている「岡崎環境学習プログラム」にESDの視点を導入し，生徒が持続可能な社会をイメージし，自分の生き方を高めることを目指した。中学校2，3年生「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」の取組を中心として，ESD新香山プランを開発し，ESDの視点を取り入れた探究的な学びを完成させた。
4 愛知県立豊田東高等学校	総合学科の特色を生かしたESDの取組ー生徒が夢を実現するためにー 3年間の学びの体系づくりである，『夢の実現』に向けてのキャリアガイダンス「3年間の学びの流れ」についてESDの視点に立って整理し，見直しを行った。特色である「プラン別学習」や「総合発表会」「環境教育」「国際理解教育」「地域連携教育」などの取組がどのような能力や態度に結び付いているのか，国立教育政策研究所が示した視点表を用いて検証した。
5 一宮市立葉栗中学校	伝統行事を見つめ，地域を考える生徒の育成ー祝い餅づくりを通じたESDの取組ー 地域を巻き込んだ伝統的な行事である「祝い餅づくり」に，ESDの視点を取り入れ，その目的や意義，卒業生や地域の人々の願いなどを生徒に伝え，地域や地域の良さを見つめ直す学習の場として捉え直すことによって，地域社会の良さを考える生徒の育成を目指した。
6 愛知県立愛知商業高等学校	高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開ーESDの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組ー

	「課題研究」にE S Dの視点を入れることにより、取組を一層充実させ、生徒が自ら考え、行動し、解決していく態度と考え方を涵養 ^{かんよう} することを目指した。マーケティング研究「ミツバチプロジェクト」を実践として取り上げ、E S Dの視点で整理し、改善を図った。
7 愛知県立刈谷高等学校	問題・課題解決能力を育むE S Dの実践－総合的な学習の時間のE S D化を通して－ 国際社会に貢献できる科学的リテラシーや国際的教養やコミュニケーション能力を備えた人材育成を目指してS S H事業を進めている。その特色として、総合的な学習の時間を「E S D」とし、現在世の中が抱えている課題・問題を発見し、その解決に向けて主体的に考えて考察することができる生徒の育成を目指した。

全ての学校において、E S Dの視点をカリキュラムに取り入れることを意識して実践を進めることができた。今回の実践は、各研修受講者だけで進めたものではなく、管理職をはじめ、学校全体で取り組んだ。多くの教員をつないで新しい実践を行うことは大変に難しいが、既にある枠組みにE S Dの視点を取り入れることは、工夫をすれば可能であることを示すことができた。

各回の研修において、研修受講者が協議を通して実践計画を見直し、学校に戻って実践を改善することができた。特に、2年目の研修受講者が、1年目の研修受講者に対して、効果的なアドバイスをしていたことは特筆すべきである。

ウ E S Dの実践報告と次年度以降の課題整理

p. 4 研修⑥、⑦では、研修受講者による実践報告会を行った。特に、研修⑦では、愛知県総合教育センターの研究発表会の場を借りて、130名の参加者の前で、発表をすることができた。

※研究発表会参加者アンケート

○参加者130名中54名が回答	1 大変役に立った・・・32名	2 役に立った・・・19名	3 あまり役に立たない・・・3名	4 全く役に立たない・・・0名
○代表的な感想				
<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな学校の発表を聞いて勉強になり、いい刺激になりました。それぞれの学校の特性がよく表れていて、それを上手に活用させながら取り組みをされ、すばらしい。 ・E S Dを授業改善にどのように取り入れるのか、具体例が非常に参考になった。新香山、緒川の発表でE S Dの視点の立て方が分かりやすい。先進的な内容なので、自校の自校の実践で追試できる具体性があり、ぜひやってみたい。発表も上手で、まさに「実行できる具体像」でした。 ・各校の実践発表を通してとても勉強になりました。本校でも教職員集団の意識を高め、ぜひ取り入れていきたいと感じました。 ・各学校の先生方の実践を聞くことができ、大変勉強になった。E S D教育は難しい、大変というイメージをもっている先生もいるので一工夫を加えるということをテーマに取り組んでいこうと思います。 				

研修⑧では、一年間の実践を振り返り、来年度に向けてどのように実践を充実していくか、協議を行った。協議の中でもE S Dのポイントとして、「つながり」や「問題解決能力育成」「自己肯定感の向上」などが挙げられた。研修受講者は、研修が終わっても、学校全体でのE S Dの取組を充実したいと来年度に向けての抱負を語っていた。

(2) 実施形態, 時間数, 使用教材, 進め方

ア 実施形態, 時間数

研修①～⑤は, 午前中は講義中心, 午後は協議中心で行った。研修⑥～⑧は協議及び発表の形式とした。研修①, ②, ④～⑦は一日日程6時間, 研修③, ⑧は, 半日日程3時間で行った。研修③は学校支援として, 学校に出かけて, 職員に講義中心の研修を行った。

イ 使用教材, 進め方

使用教材は, プリント等を作成し, p. 6～13に示した内容を中心に解説した。なお, 学校での研修教材として, 研修で用いた内容をまとめた冊子「E S D (持続発展教育) を学校に取り入れる」を作成した。また, 校内研修用にeラーニングを作成した。今後, この冊子やeラーニングを活用すれば, 学校にE S Dを導入するための研修は円滑に進むと思われる(冊子, eラーニングについての問い合わせ先: 愛知県総合教育センター研究部E S D担当)。

研修の進め方は, E S Dの多面的な理解, 学校における実践, 実践に関する報告・検討・協議の繰り返しで進めた。最終的な各校の実践のまとめは研究報告会及び研究紀要で発信した(「生きる力を育むE S D実践カリキュラム開発に関する研究」愛知県総合教育センター研究紀要第102集 2013.3 愛知県総合教育センターウェブページで公開)。

協議については, 連携先のE P O中部のチーフディレクターのファシリテーションがすばらしく, 研修受講者だけでなく, 担当の教育センター職員も非常に勉強になった。

(3) 研修の評価

研修者7人に, 全研修終了後に, 下記の質問1から3のアンケートを実施した。

質問1 今年度研修を行って得た成果は, 今後, 学校の教育活動に役立つと思いますか。

①とても役立つ	②まあ役立つ	③あまり役立たない	④全く役立たない
6人(85.7%)	1人(14.3%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

理由

- ・研究に参加したことで, 学校内の研究がたいへん進んだ。
- ・学校におけるE S D推進に, さまざまなアドバイスをもらった。
- ・E S Dの概念を学ぶこと, また異校種との交流は新鮮で, 授業や教育活動にアレンジを加えようという思いや必要性を感じることができる。
- ・とても役立つと思います。私が研究することで少しずつですが管理職をはじめ, 他の先生方もE S Dに関心をもっていただけるようになりました。これも一つの成果かと思います。
- ・全く, E S Dを知らなかった私が, E S Dを人並みに理解することができ, かつ, 校内に浸透させる方向へとつながったので。
- ・学校全体に広げていけるよう, 自分の努力が必要であると思う。

質問2 今年度研修を受けたことが, あなた自身の資質向上に役立ちましたか。

①とても役立った	②まあ役立った	③あまり役立たなかった	④全く役立たなかった
7人(100%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

理由

- ・研究を進めるために必要な, いろいろな力をつけることができた。
- ・E S Dについて, その進め方について理解できた。

- ・生徒にとって何が必要なのかを考える機会となった。
- ・私も凝り固まっていた一教員であり、変わろうと思うきっかけとなった。生徒を動かす場面、ワークショップや企業訪問、ゲストティーチャーの利用など多くの学びの場面を取り入れ、特に生徒に刺激を与え、考え発表させていく必要性＝授業カリキュラムの改善する必要性を痛感した。
- ・本校独自のE S Dプランを作ることができた。
- ・特に異校種の先生方との交流は、私自身の資質向上に役立ちました。また、発表する機会、まとめるといった作業を頂いたことも大変役立ったと思います。
- ・E S Dを知ったことで、E S Dに関わる講演会やイベントに積極的に参加し、学ぶことが増えました。

質問3 今年度研修を受けたことに対し、総合的に見た、満足度を教えてください。

①大変満足している	②まあ満足している	③あまり満足していない	④全く満足していない
6人(85.7%)	1人(14.3%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

理由

- ・ネットワークが広がり、講師依頼、ゲストティーチャーの紹介等、助けていただいた。
- ・多くの先生方の考え方や思いに触れることができた。
- ・まず、意識を変えること。少しですが、本校においても学校全体でE S Dに取り組めるのではという可能性が見えてきました。
- ・学校の中にE S Dが浸透してきていることを実感した時に、満足しました。
- ・個人としての刺激, Skill up することはできたが、それを学校に還元することができていないし、また教員に吸収する意識や場面が乏しい。学校そのものを動かし、変えていく気運をおこしていきたいし、おきてほしい。

アンケートの結果、7名とも研修に対する評価が高いことが分かる。また、理由の内容から、学校にE S Dを導入するという目標に向けて懸命に努力したことが浮き彫りになったと考える。

Ⅲ 連携による研修についての考察

今回の対象となった、E S Dについては、ユネスコスクールの普及などで徐々に広まりつつあるが、学校への導入に関する研究などは、先行事例や文献も少なく、また、大学での研究もあまりない。このような状況で、E S Dの普及を使命としているE P O中部との連携は、研修の充実としては最も効果的であった。E S Dは、包括的な概念で、分かりにくい。学校に導入する場合のポイントは、E S Dを的確に理解した上で、総合的な学習の時間の活用や地域や外部団体との連携、学校の経営目標に加えることなどが挙げられるが、E P O中部のチーフディレクターはそれらについて、協議を通して、研修受講者にうまく伝えることができた。協議を活性化させ、研修受講者の気持ちを引き出し、研修の目標に到達させるファシリテーションの技術は、研修受講者だけでなく、企画した総合教育センターの職員も学ぶところが多かった。

N P Oの職員は、教員や教育センター職員のもつ既成概念を超えた視点で教育について捉えることができるので、E S D以外でも、いろいろな教員研修に加わっていただくと、効果が大きいと考えられる。ただし、学校教育になじまない場合もあるので、研修担当者は、事前打ち合わせをしっかりとし、教員研修に効果があるようにうまくコーディネートする必要がある。

IV その他

[キーワード]

E S D 持続発展教育 持続可能な開発のための教育 持続可能な発展のための教育 持続可能
総合的な学習の時間 カリキュラム開発 授業改善 環境教育 国際理解教育 人権教育 開発教育

[人数規模]

A. 10 人未満 (学校支援の校内研修も含めると D. 51 名以上)

[研修日数 (回数)]

C. 4～10 日

[問い合わせ先]

愛知県総合教育センター 研究部 E S D 担当
〒470-0151 愛知県愛知郡東郷町諸輪上鉾 6 8
TEL 0561-38-9503 FAX 0561-38-2780

環境省中部環境パートナーシップオフィス (E P O 中部)
〒460-0003 名古屋市中区錦 2-4-3 錦パークビル 4 階
TEL 052-218-8605 FAX 052-218-8606